

「消化器切除標本の取扱い方」

名古屋大学講師・第1外科 神谷 順一 編著
名古屋大学教授・第1外科 二村 雄次

癌研究会附属病院・名誉院長

西 満 正

著者は私の最も敬愛する、しっかりした癌外科医の1人である。難治癌に挑戦し世界に誇るべき素晴らしい成績をあげている理由が、この本を読めばよくわかる。外科医にとって、手術材料の観察、記載、撮影、固定、切り出しが重要なことは言うまでもない。

物ありて 形、心の

生まるなり 形のなくば

物、心なし

肉眼形態学はすべての基準であり、最近の画像診断の進歩によりますます重要で面白いものになった。この本はその重要性、面白さをよく教えてくれる、一見、面白おかしく書いてあるが、その核心を突く洞察力は抜群である。

学ぶより 好むがまさり

好むより 楽しむがまさる

活物究理も

標本整理は真実を知ろうとする者にとっては、実に楽しいはずである。外科医の日常は、内科+手術の毎日が多忙であるが、その多忙の中にあ

って、しかも手術が終わって疲れたときにやる標本整理はきつくないと言えるようになる。しかし、その日のうちに済ませるくせをつけることは大事である。“もう一息がんばりましょう”と言う著者は癌研魂の権化である。本物の外科医である。

“馬を走らせて花を見る”日常の中にあって、“馬から降りて花を見る”喜びと重要性、落ち着いて標本の形の中に物と心を見る時間(ほとんど夜中)を持つことは外科医の知識、技術、人格の最も力となることである。

食道、胃、腸、肝、胆、脾のすべてについて、最も大事な取り扱い方が親切に書かれている。私はいつも“なるべく生理的な状況に固定せよ”と姿作り標本を推奨している。この本ではそのような自然態における観察も強調されている。しかもマクロ—ミクロの繰り返しの道程における取り扱い方、観察、記載の仕方が微に入り細に入り楽しく書かれている。一般的な取扱い規約よりもより

深い心をつかんでいる。

物をよく見て正確に記載すること、そしてどうなっているのか、どうしてかと深く考えることが、自然科学の始まりである。統計や疫学や分子生物学も大事だが、外科医にとって最も大切なのは、正確な局所解剖学であり、臓器学であると思う。1例1例の標本整理を正確丁寧に素直にやり、しかも新しい光を当てることはものすごい力となる。

近年、これほど楽しく親切でしかも重要なことを手ほどきしてくれる本は世界中にない。図も美しい、心憎いユーモア、格言にもあふれている。少しオーバーだが、血と汗とホルマリンの匂う革命的な教科書と言ってよい。必ず隅々まで読んで実行してほしい。毎日の正しい診療や医学の進歩に必ず役立つはずである。特に若い消化器外科医必読の書である。

● B5 頁190 図22 写真42
原色図117 色図10 1993
定価9,991円(税込) ㊦400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)